北から南から

この町を守るのは誰だ！！ レスキュー隊のある町 愛と勇気で守ります 西尾久四丁目町会区民レスキュー隊

東京都荒川区役所 区民生活部 防災課

1 はじめに

西尾久四丁目町会区民レスキュー隊は、東京都荒川区で最初に発隊した区民レスキュー隊で、ちょうど阪神・淡路大震災の２か月後の平成７年３月15日に発隊し、今年で24年目を迎えました。当時、阪神・淡路大震災のニュース映像を見た住民たちが、「場所が違えば自分たちも同じだ」と考え、地域の安全と安心のため共助の組織として結成した歴史ある区民レスキュー隊です。

2 組織の構成

西尾久四丁目町会の区域は、東京都荒川区の北西部にあり、約1,200世帯、3,000人が暮らす町です。区民レスキュー隊の隊員は、自営業者や会社員などのさまざまな職業の方々で、約40名が登録されています。

隊の編成の特徴としては、西島　茂（にしじま　しげる）隊長のもと、町会の区域を４つのブロックに分けて、それぞれのブロックを担当する部隊を１隊ずつ配置し、即応体制を確保しています。

各隊員たちは、「自分たちの町を守るのは自分たちだ」という思いから、仕事の後や週末等に積極的にレスキュー隊の活動に参加しています。

3 区民レスキュー隊の活動

区民レスキュー隊は、地震の発災直後に消防等の公助が到着する以前に住民の手によって早期に倒壊した建物から要救助者を救助することを目的としています。

これは、阪神・淡路大震災の教訓から、要救助者を近隣住民の手でいち早く救助することにより、要救助者のクラッシュ症候群のリスクを軽減するとともに、消防機関等の効率的な部隊運用に資するものです。

そのため、地震発生後、１時間以内に要救助者を救出することを目指しており、迅速な救助活動のための知識・技術の習得、資器材の充実に努めています。

保有する資器材は、バール等のほか、エ

西尾久四丁目町会の総務部長 白部 誠さん（左）と
レスキュー隊長 西島 茂さん（右）

整備されたエンジンカッターやチェーンソー

ンジンカッター、チェーンソー、鉄筋カッター、削岩機、20トン油圧ジャッキなど、高度な救助活動に対応できるもので、さらには、フォークリフト２台を救助活動に活用できるなど、車両による救助体制も整備しています。

訓練は、年４回の定期訓練のほか、応急救護訓練や消火用Ｄ級ポンプ・大型消火器を使用した消火訓練を消防署や荒川区防災課と連携して実施しています。

これらの長年における実践的かつ積極的な活動が評価され、平成22年12月には、消防庁長官賞、平成25年９月には、防災功労者として内閣総理大臣表彰を受賞しました。

内閣総理大臣表彰受賞

また新たな取組として、荒川区が整備した「永久水利施設」を活用した訓練にも消防署・消防団とともに参加しています。永久水利施設とは、震災時にも枯渇することのない消火用水を確保するため、河川水や深井戸を水源とし、周辺の防火水槽を消火用ポンプで中継しながら充水していくための施設で、平成26年から現在まで、荒川区内７か所に整備されています。これらの新たな防災施設を活用した災害対策にも区民レスキュー隊の力が活かされています。

4 おわりに

現在、荒川区内では58組織95隊の区民レスキュー隊が活動しています。各区民レスキュー隊が区や消防機関と連携し、防災訓練や防災イベントで活躍していますが、どの隊にも共通する問題として、隊員の確保が困難なことが挙げられます。

レスキュー隊長の西島茂さんは、「私自身も会社員なので、レスキュー隊の活動は大変ですが、自分たちの町を守るということは、本当に大切でやりがいのあることなので、少しでも訓練の時間を作ってレスキュー隊の知識・技術の維持・向上に努めたい。区民レスキュー隊の魅力をより多くの人に伝えていけるようにさらに頑張っていきたい」とレスキュー隊長として抱負を力強く話してくださいました。

また、西尾久四丁目町会総務部長の白部誠（しらべ　まこと）さんには、「歴代の町会長やレスキュー隊長が築き上げてきた救助技術や『自分たちの町を守るのは自分たちだ』という熱い思いを私たちがしっかり受け継ぎ、次世代に繋げていきたい。」と区民レスキュー隊への思いをお話しいただきました。

区民レスキュー隊の魅力ややりがいを伝え、活動を支援するため、荒川区では消防署と連携した防災リーダー講習の実施や、若い世代向けの防災イベントで震災演習を実施し、区民レスキュー隊の活躍をＰＲしています。

平成29年中の荒川区の火災発生件数は、東京23区の中でも最少で、しかも３年連続で最少件数を記録しています。区民レスキュー隊の活躍がこの数字に表れていることは間違いありません。